
Assault Witches; **第1巻** “ Zitadelle ”

自営愚民

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Assault Witches；第1巻“Zitadelle”

【Nコード】

N3033I

【作者名】

自営愚民

【あらすじ】

第二次ネウロイ大戦。西ヨーロッパの西部戦線、スオムスの北部戦線、そして北アフリカ戦線…しかし、それ以上に激烈で、過酷を極めた戦線があった。それが、オラーシャの東部戦線である。

1941年、ネウロイがオラーシャに侵攻。その一年のうちに、人類は悲惨な敗北を繰り返した。しかし、モスクワの、そしてツァリツインの戦いを制した今、我々は優勢に立っている。

連合軍各国は協力し、この東部戦線に地上攻撃ウィッチの統合作戦部隊を結成した。それが第301統合地上攻撃航空団、通称“AS

sault Witches”である。

しかしこの古い帝国において、敵はネウロイだけではない。厳しい自然、旧弊に満ちた政府、そして秘密警察の陰謀…。

1943年。今こそ反撃の時だ。

第0章 時の刻印

一九四二年十二月二十二日 モスクワ西区、カール
スラント大使館、一三〇〇

極寒のモスクワに、今日もクレムリンの時計台の音は響く。その緻密で繊細な音色が、よく晴れた戦時下の空を満たしていく。

戦争が始まって一年半。まだこうして時計台の音を聞いているのは、まさに奇跡としか言いようがない！思えばあの吹雪荒れ狂う四年の十二月、極寒に耐え乾坤一擲の防衛作戦の末、我々人類はこうして未だにこの町を失っていない。

だが、未だ母なる大地は広く瘴気の下にある。「解放」には、このモスクワ防衛よりもさらに多くの犠牲を払わなければならないだろう。どんなに緻密で巧妙な作戦を組んだ所で、犠牲の無い戦いなどないのである。

上空に魔導エンジンが響く。今日もまた、「その日まで」モスクワ上空を守り続けてくれるのだろう…。

温かい大使館の部屋は、食器の触れあう音と時たまの声以外、実に静かだ。鐘の音もここではほとんど聞こえない。窓の外で塗りたくった街並みが見える窓ガラスが、寒さといでに良い音まで遮ってしまったているのだ。

「…しかるにルーデル君。この豚肉はこの物だと思ukai?」そう言ってその将官は感慨深げにフォークの先のコトレータを凝視する。

「オラーシャじゃなきゃ…せいぜいリベリオン産でしょう、ゲオルギー・コンスタンチノヴィチ」女性士官はそれに対して一瞥もせず、同じコトレータを黙々と「消費」する作業に集中している。

「その通り、新大陸の友人は何でもくれた。トラック、弾薬、大砲、

それにストライカーも…この豚肉だってそうだ」そしてコトレータは満足そうなジューコフ將軍の口の中へ一口で消えたのである。

「なるほど…道理でウォツカ臭くないと思ったんですね」

「一本取られたな！」

二人の腹の底からの笑いが、しばらく静かだったこの部屋に響いた。

「一杯どうだ、ルーデル君？」

「喜んで」

ボトルの凍りついたスタリーチナヤ・ウォツカで、ルーデルの上げたショットグラスが満たされた。彼女はそれを、まるで喉を素通りさせるように一気に流し込む。それが本式であり、最良の、かつ慣れていない者にとっては「苦しくない」飲み方なのである。

「それにしても、ウォツカは何かに似ていると思うのですが」

グラスを置きながら、彼女は微笑みを浮かべて問いかける。

「ふん、女か？」

「統制です。多すぎても、少なすぎても意味がない。悪いことだけそうあつさりと言いつつ放った彼女は、得意げな顔でジューコフが何と言いつつ待った。

「なるほど、そうかもしれない…だが問題は量だけとは限らんぞ？」

意外な答えに驚いているルーデルを見て、彼はほくそ笑みながら続けた。

「むしろこう付け加えた方がいいな。『そのウォツカがオラースキー・スタンダールトやスタリーチナヤか、それとただのエンジンの不凍液か』」

「…つまりどういう事ですか？」不凍液の事はどうでもいいようだ。「簡単なことだ。少々の統制でも行つた人間が最悪ならそれは有害だ。しかし、厳しい統制でも行つた人間によつては気にならないこともある…と言えればいいかな」

「統制をおこなつた人間の善し悪し…つまり、腐敗などで？」

「柔軟性」そう一言でジューコフは言い切った。「その他のことはすべて後から付いてくる」

「この国で統合作戦部隊を組織し、合同作戦を行うにおいて、それらは無視できない問題ですね。特に、この戦争においては」

「その通りだ。この戦争においては、今までにない新たな組織、新たな前例、新たな関係…そういった物を導入する柔軟性が必要だ…」
「だがオラーシャがそれを受け入れるのは難しい」

「そう。前にも言った通り、我が国がこの戦争に打ち勝とうと思うなら、固い統制を少し耕して柔軟にしなければならない、そうしなければ他の諸国の動きに付いていくことができないだろう。」

「なるほど、柔軟性のない腐敗した統制が、そのような変革を阻んでいる…という事ですね」ルーデルがそんなことを言っている間に、ジューコフは彼女が皿を大体空けた事に気付いたようだ。

「ああ、その通り。…ところで、紅茶とデザートをそろそろ出すように頼もうか？」

「ええ！」彼女の傷が一文字に入った顔に、初めて女性らしい笑みが浮かんだ。

「1930年代の政治的混乱時代が奪ったもつとも大切な物、それは健全な国際的協調関係だ。今それらを失ったことで我々はとても苦しんでいる。」

「なるほど、それらが未だに不自然な統制を受けているのはよくありませんね」そしてブリヌイにフルーツソースとカテージチーズを付けながら、こう続けた。「とりわけ戦時に軍がそれを得られないのは問題です」

「その通り、つまり軍総司令部の上に立つ内務…おっと！」一瞬ジューコフの顔が凍りつく。

「心配ありません、ここは治外法権ですから」「それにこの部屋に居るのは二人だけです」

「…すまん、いつもの癖だ」

そして咳払いして彼は続けた。

「とにかくだ。この戦争に勝つためには、我々はたくさんの障害を内に抱えている。だが私は君の考えている統合作戦部隊を創設する事こそ我々がそれらから逃れ、やがて変えていく最良の方法だと考えている。万難を排して遂行し、実績を積める部隊にしてほしい。援助や保護は惜しまない。」

「はい、喜んで」凜々しい顔で、ルーデルはそれに応じた。

「それは良かった」

満足そうに、彼は背もたれに身を寄せた。そして、目の前のキセーリを幸せそうに食べているルーデルを見て感慨にふけた。

「この甘い物好きの若い女性が、従軍経験豊富で、かつ政治力もあるとは――」

晴れたモスクワの空に、今日も変わらず粉雪が舞っている。

茶房「白砂亭」、一八四〇

一九四三年一月八日 新潟、

新潟市の湊町から信濃川の対岸を望むと、扶桑海航路の出る萬代島、山の下埠頭、そして駅の付近以外は一面の水田であることが分かる。

初夏から秋にかけてそれは、揺れる稲穂が広々と信越本線沿いからはるばる五頭山系に至るまで延々と広がっている風景だ。しかし、冬の新潟でそれは時に一mにも及ぶ雪の下に隠れ、経帷子を広げたような雪原にすぎない。

「しかし、リバウの雪とは違うな、ここの雪は…」眼帯の女性海軍士官が、街路に降り積もる牡丹雪を見てつぶやく。

「うん、それにしても懐かしいね、リバウ。あの時は二人とも幼くて…」

「戦場にも慣れてなかったな」

坂本美緒にとって、それは今では郷愁の一頁であった。バルト海に面したハンザ同盟の古い港町から、彼女にとつての世界大戦が始まったのである。当時はまだネウロイの攻勢一方で、まだ一日一日を生き延びることで一生懸命だった。

「リバウじゃよく雪が降ったものだ。初めて見たときはずいぶんとはしゃいでいたな」

「私も、あの時はまだ無邪気だったもん」

「それで次の日、霜焼けで手をダメにして…ずいぶんと大目玉だったな」

そう言つと腹の底からの笑いを見せ、そしてまた揺れる信濃川の水面に目を移す。漁火とネオンと川沿いの街灯が混じりあい、混沌とした中に不思議な美観を作り出している。

「私はオラーシャへ、美緒はブリタニアへ、みんなバラバラになつて…」

「寂しくなるな」

その時、江守貴子の眼には、今までにない美緒の表情が写っていた。いつもは豪気で精悍なその顔から強気さが消え、物悲しさと無常観がその表面も内面も支配しているその表情が。

それを見た貴子の心に突然、締め付ける何かが去来した。つまり何か言わなくてはという気持ちには襲われたが、はつきりとどうすればいいのかが分からなかった。求めればいいのか与えればいいのか？その美緒の横顔は、彼女を混乱させるのに十分だった。

「ねえ…なんか一言、私が行く前に言っておきたい事とか…無い？」
かなりはにかみながら、やつとのことと貴子は言った。

「何か一言…いきなり言われてもなあ。つまり…アドバイスとかでいいのか？」

唐突な頼みに、美緒は困り切った苦笑いをする事しかできなかった。機知と言うやつの中でもとかく簡単な物さえうまく言えない彼

女にとって、貴子の気持ちは理解の範疇外であった。

「そ、そう。そんな感じ……」

「ああ、まあ、ちよつと待っていてくれ」

ぬばたまの 黒き水面で な去りそと

泣き濡る妹を 我は忘れず

「どうだ、こんな感じだな。」

「……これは？」

「別れの歌をちよつとな。人に聞かせる物じゃないかも知れないが勘弁してくれ。」

「うん、ありがとう……」

貴子の心はまだ混乱していた。何かが自分の中に入ってきたような気がする。だが、それがいったい何なのか、彼女は掴むことができなかった。

「それでは、私は帰るぞ。イチキュウサンマルの急行に乗らなきゃならんからな。朝早いだろうからお前も寝るがいい。」

「じゃあ、またね」

なぜだかよくわからないが、なぜか声があまり出なかった。何かが胸の奥からこみ上げて来るような感覚に邪魔されて、途中で止まってしまうのがなんとなくわかった。

「次はエルベの川岸で会おう！」

そんな美緒の声も、もはや聞こえはしなかった。ただ耳の中では「泣き濡る妹を、我は忘れず」その言葉がひたすらリフレインしていた。

「泣き濡る妹を、我は忘れず」

気がつけば彼女もまた、声を上げて泣き出していた……。

“支援砲撃が来ない”何よりそれが問題であつた。頼もしい榴弾砲の爆音も、聞くと救われたと確信できるカチューシャかネーヴェルヴェルファアの飛翔音も、一切聞こえない。

「フリッツめが…砲撃はどこだ！まだなのか！」

この堡壘を指揮するガストロフ大佐はこの状況にもかかわらず砲兵部隊が何もしてこない事にいら立ち、敵弾に震えるトーチ力の中でしきりと双眼鏡を目に当て、じわじわと近づいてくるネウロイの大軍を眺める。おそらく支援なしでは、三十分もかからずこの堡壘は制圧されるだろう。

「砲兵部隊から電報が入りました！」

泥だらけの少尉が金切り声を上げて入ってきた。彼の顔は恐怖にひきつり、味方の返り血がその軍服に点々と付いて、まこと無残な状況だ。

「読み上げる！」

「『物資不足ニヨリ砲撃チウシ 補給ヲ待チ再開ス』…」

「なんてこった…！」

「もう終わりです！」

青ざめた少尉がほぼ半狂乱の形相で叫ぶ。今やヴォルガ川を背にし、撤退する方法も無い。

「第三小隊、弾薬が底を尽きました！」

「二番トーチ力、残弾ゼロ！」

さらに絶望的な知らせが堡壘のここから聞こえてくる。もはやこの状態で、理性を保つことなど無理だ。後ろを見れば、獣のように叫び声を上げながら川へと飛び込む者たちが一人、また一人と増えていく。しかし、身を切るように冷たい川の中では一分とたず、それ以上持ったって督戦隊に撃ち殺されるだけの事である。そして、川はまた血で染まっていく。

「もはやこれまで…」

ガストロフは堅いフラーシュカ（士官帽）を脱ぎ、そしてサーベ

ルに手を掛けた。最後の手段、銃剣突撃である。少尉はただ、じつと最後の覚悟を決めたその目を見続け、その一言を待つしか方法は無かった。

しかしその時、久々に聞くある音がぼろぼろのトーチカの中に響いているのが分かった。ついぞ使う事無く破壊されるだろう無線電話である。もはや黒魔術師にでもすぎる思いの彼は、その受話器を取る事にためらいはなかった。

「よしよし？」
アリョー

「はい、こちらは第八〇五地上攻撃連隊第一中隊。現在作戦空域に接近中。」

無線から聞こえてきたのは聞きなれない女性の声だった。

「…作戦空域？」ガストロフはまだ状況がつかめなかった。「つまり君たちの任務は…何だね？」

「航空支援と聞いていますが」

「本当か…？」

「その通りです。攻撃を希望するグリッドを示して下さい」

そう聞いた彼は、だしぬけに無言で机から地図をつかみ取った。

そして、前線を一目見た後受話器に向かって興奮気味に早口で叫んだ。

「第七戦区、四、十二、二十五！細かい事はどうでもいい、その辺の動くものは全部薙ぎ払え！全部だ！殲滅しろ！」

「グリッド、確認しました」そして最後にこう付け加えた。「それでは、我々が来るまで壊滅は避けるように」

「よし…任せたぞ！」

「諒解！」複数の生き生きとした声が、受話器から響いた。

彼はしばらく身動きができなくなった。考えもしなかった奇跡が、起こっていたのだ。そしてまた動けるようになった時、頭にフラッシュを戻しながら、なぜかよくわからないが顔が紅潮するのを感じていた。

「どうしました？」

「おい、コーリヤ」

「砲撃支援ですか？」

トーチカの外では、まだ耳障りな爆音が響いている。

「もつといいものだ」

もう彼の感情は抑制の限界だった。口角を崩しながら、必死に口調を抑えて言った。

「ウィッチだよ、しかもうんとね」

ヴォルガ上空二百m。一隊のウィッチ達が戦場目指し空を掛ける。空中は燃え続ける都市の黒煙で視界が悪い。高度を落とし目標地点を見失わぬように低速で飛び続ける。

河畔に見えるのは、かつてオラーシャーの工業都市であり、数十万もの人々が住んでいた都市、ツアリツインだ。かつては栄えたその街も今はその面影すらなく、ただ死臭と炭化臭と溶鉱炉のような熱気が漂うだけの煉獄だ。

だが、それでも戦わなければならない。これ以上土地を失わないために。

「突撃！」

地上攻撃隊の隊長がシャーシユカ刀を抜き、一路敵へと緩降下していく。他のウィッチが一直線にそれに続く。下の部隊は戦線が崩壊しかけていて、まさに修羅場だ。

一九四一年六月。クールラントとの国境を越えて、異形の敵ネウロイはついにオラーシャにも侵攻を開始した。開戦後間もないうちに、機甲部隊、航空部隊ともに壊滅。国家崩壊の恐怖は我々を委縮させ、一度ならずヨーロッパからの全面撤退も考えられた。だが、そうはしなかった。冬の寒さが、生きた機械であるネウロイにとうとう打ち勝った。オラーシャの冬將軍はあの圧倒的なテクノロジーマットでも倒すことができなかったのだ。

だが今も、それらの勢いは収まっていない。四二年の夏、クリミ

アを落としたネウロイはさらにこの町へと殺到した。厳しい抵抗がすでに三ヶ月続いている。しかし、モスクワを守ったのと同じく、ここでも防衛を成し遂げなければならない…。ツアリツインを落とされる事は、アジアへの玄関を開いたのも同様だからだ。人類はここを失う事を許されない。

機関砲と爆弾の嵐の後、攻撃を仕掛けていたネウロイはすべて消えた。まったく、見事な戦いである。まだ黒煙くすぶるその戦場を、ウィッチ達がゆつくりと旋回していく。

「こちら第一二三狙撃兵師団より地上支援隊々長へ…危つく全滅するところだった。名を何と言う？」

「エカテリーナ・M・イエゴロヴァ、航空隊少佐」

「イエゴロヴァ少佐、支援を感謝する。君達のおかげで死なずに済んだ。」

「いえ、自分は今日もまた義務を果たしたまでです、ガストロフ大佐」

「ふむ、全く頼もしいな…。」

地上の歩兵たちは皆剣や銃を掲げ、あるいは手を振って自分たちに感謝の意を示し、そこから「万歳！」^{ウラー}の歓声が上がっている。

「祖国のために」^{サ・ラージナ}

そうつぶやくと、少佐は静かに無線交信を終えた。そう、祖国のために、何度でも戦う、と誓いながら。

「祖国のために。」

ガストロフ大佐は空を見つめながら、それに返すようにつぶやいた。

第1章 新たなる旅立ち

一九四三年四月二日 モスクワ中央区、パヴェレツ

キー駅 一二三〇

言葉が通じず、文字すら読めず、ただ頼りになるのは一枚の切符と乗るべき列車の記憶だけ。そんな状況下でユノー・ボイスは全力で駅のコンコースを走り回っていた。左手でトランクを持ち、背中には雑嚢を負い、そして右手で胸にスケッチブックをしっかりと抱いて、

「ごめんなさいっ！ちよつとどいてください！！」

などとカールスラント語でわめきながら。もちろん、ここオラーシャで通じるはずはもちろん無く、ただ何の騒ぎかと皆不思議そうに見えているだけである。

そんな風に慌てて走っていると突然、彼女は前を歩いている背の高い中年の兵士にぶつかった。あまりの体格の違いで、ユノーだけが後ろへと跳ね飛ばされる。

「ご…ごめんなさいっ！」

「気を付ける馬鹿野郎！」

そうオラーシャ語で言われたが、何を言われたかさっぱり分からない。ユノーはしばらく呆然としていたが、すぐに正気を取り戻し転んでいる場合ではないと気付いた。そして慌てて落としたトランクを拾い上げ、おたおたとその重さによろけながら、また走り始めた。

人垣のむこうに、緑色の客車とたなびく蒸気機関車の煙が見えた。自分が覚えている限り、あれがツァリツイン行きの列車のはずだ。確かに有蓋車だけを繋げた他の列車よりは立派だが、それ以上にやつつとした達成感でさらに立派に、光り輝くようにすら思えた。

「はあ…なんとか間に合った…」

ほっと一安心で、ユノーはトランクをホームに置き、立ち止まって乱れた息を整えた。オラーシャの春先は寒いにも関わらず、彼女は汗びっしょりだ。

「…あれ？」

突然、彼女はなぜか違和感を覚えた。何かあるべき物が無いのだ。具体的には、荷物が何か足りないのだ。

「あれ？私、スケッチブック、持ってたはずなのに…」

そう。胸に抱えていたスケッチブックだ。確かぶつかって転ぶまで持っていたはずだ。その後…どうしただろう？落ち着いて考えてみよう。

トランクの中だろうか？慌しく中身を見る。しかし、入っていない。雑嚢はどうだろうか？しかし、その中にも入っていない。となれば考えられるのは一つだけ。ここまで走ってくる途中に落としてしまったのだ。

「そんな…どうしよう…」

後ろを向く。しかし、人ごみで駅の床すらまともに見えないような状態の中、落ちていたって見つかるはずは絶対ない。ただ、ライン川の流れのごとくゆっくりと進む大勢の人々が見えるだけである。今から探しに戻れば？そんなのはもつと無理だ。あと数分で列車は出発してしまうのである。

「もう…どうしていいんだかわかんないよお…」

彼女は頭を抱え、そして掻きむしった。大事な、絶対になくしたくない物を、なくしてしまったのだから…。言葉も通じぬ異国の地で、なすすべもなくただ立ちすくんでいる、そう考えると目に涙も浮かんできた。

「これ、キミのでしょ？」

突然、肩越しに誰かのカールスラント語が聞こえた。

「え…？」

ユノーは涙を拭いながら振り向いた。そこには、誰か自分よりも

少し年上で、ずいぶんと優しくそんな人が、何か小脇に挟んで持っていた。多分カールスラント軍人だろう。

「はい、これ。もう落とさないでね」

そう言うのと、その人は小脇に挟んでいたものをユノーに手渡した。それを見て初めて、彼女ははつとなった。それは探していたスケッチブックだった。しかも、表紙に“Junno Beuys”と書いてある…。

「…あ、ありがとうございます！」

急に彼女の心を覆っていたものが晴れ、うれしくてたまらず涙が出そうになった。そして大切なスケッチブックをギュツと抱き、幸せそうな笑顔を見せた。

その人も、それを見てユノーと同じような笑みを浮かべた。

「よかった…私が乗る汽車のホームで、ちょうどキミが気付いておるおろしていたから。多分別のところで気付いてたら、私は渡せなかったと思う」

「ありがとうございます。これ、とっても大切な物なんです！」

「そう。見つかってよかったね」

その時だった。鐘が鳴り、いよいよホームに止まっているツアリツイン行き列車の出発が近づいた事を知らせる。

「じゃあ、これで。私はこれに乗るから。」

「ありがとうございます。さようなら…」

ユノーはすっかり喜びに満ちあふれて、まだスケッチブックを抱きながらぼんやりとしている。そのせいだろうか、目の前に停車している列車が自分の乗るべきツアリツイン行きだという事を忘れていた。

「これ、キミも乗るんじゃないかって思うけど？」

「え？…何ですか？」

その時とたんに、ユノーははつとなった。そう、自分はこれから目の前の列車に乗って、出発するところだったのである！彼女はあ

わててトランクを左手に持ち、スケッチブックを抱えて走り出した。しかしその瞬間、機関車は野太い汽笛の音を鳴らし、彼女を残して動き始めた。

「ごめんなさい！忘れてましたあ！！」

「早く来なさい！乗り遅れるよ！」

そのうちどんどん速くなるだろうが、今はまだ遅い。それでも重い荷物を持ったユノーにとって追うのは大変だ。必死に追いかける。しかし、自分を今日助けてくれたその人が乗る客車には、追いつきそうに追いつけない。

「早く！今ならまだ間に合うから！」

とにかく必死にユノーは走って、何とか乗ろうとする。シリンドーの動く音の間隔がだんだん早くなってきているような気がする。それでも、必死に追いかける。

「トランクを渡して！受け取るから！」

ユノーはトランクを投げ渡す。これでだいぶ身軽になった。列車は早くなってきたが、まだこれなら追いつけるかもしれない。

「手を貸して下さい！」彼女は大声で叫ぶ。

「つかんで！」

ユノーはその目の前に差し出された手を、必死に握った。もちろん右手はスケッチブックを抱えているから利き腕ではない方で握るしかない。それでも、ありったけの力を出して握った。

「がんばれ！もう少ししょ！」

そして、彼女はついに上手く客車のデッキに乗る事が出来た。と、その直後、ホームの終端が見えた。列車はさらに加速し、モスクワを離れていく…。

「二回も助けていただいて、す、すみません、大尉殿！」

そう言つて、急にユノーは取り繕ったようなわざとらしい敬礼をした。

「大尉殿？あはは、そんな堅くならなくてもいいの。それよりもよかったね、無事に乗れて。キミの名前は？」

「ユノー・ボイス。カールスラント空軍一等曹長です！」

「フランツィスカ・ランゲ。同じく大尉。」

二人は改めて、ピシリとした敬礼を交わした。

一九四三年四月二日 モスクワ―ツァリツイン間 1番

急行車内 一三四五

大戦が始まり、どこの国でも旅客需要が増大するにつれ、車両不足になるようになった。とりわけオラーシャでは、極端な客車不足によって大部分の旅客列車が貨車による代替となり、まともな座席もまともな客車も望めない状態となっていた。

しかし、流石はトップナンバーを持つ看板列車。一等車、寝台車まで連結する堂々の編成である。他にそのような編成を維持しているのはモスクワ―ペトログラード間の「赤い矢」号、モスクワ―ウラジオストク間の「オラーシャ」号など、名前の付いた急行列車くらいのものである。戦時体制下、食堂車は外されてしまったようだが…。

モスクワ郊外の農園と別荘^{ダイチヤ}が点在する中を、先頭に双頭の鷲を飾った蒸気機関車は寒風切って走っていく。まだ雪はずいぶん残り、除雪された後の雪壁がレールの鉄錆で茶色に汚れて高くそびえている。しかしそれらも間もなく融け、一面の泥濘へと変化するのだろう。そして、その中で若草は育つのである…。

「このサクランボ、半分あげるわ。だいぶ疲れたでしょ？」

「え、いいんですか！？大尉の分は？」そう言ってユノーはフランツィスカが差し出した紙袋の中を見る。中身はずいぶんとおるようだ。

「いいの。ちょっと多く買いすぎたし。それに―」

「それに？」

「仲良くしないと。キミとは、長い付き合いになりそうだから」

それでもユノーは、まだサクランボをつまむのをためらっている。それを見たフ란ツイスカは、一、二個手に持ち、食べてみせる。「なかなかおいしいわよ。いらないの？」

「あ……」

コンパートメント内に甘酸っぱい香りが漂ってきた。それをかいだユノーは、とたんに今まで朝から何も食べていなかった事を思い出した。腹が鳴る。そして、その恥ずかしさに顔を赤らめてしまう。「じゃあ……いただきます……」

そう言つて、顔を伏せながら紙袋へと手を伸ばした。

「あはは。恥ずかしがり屋さんね。」

途中駅に列車が着くと、一斉に客車に食べ物、飲み物、酒、煙草、その他の諸々を持った商人達がたかつてくる。戦時体制だというのに、どこからそんなに商品を仕入れたのか……というくらいに。いや、彼らにとって戦時体制よりもまず自らの生活が第一、なのかもしれない。

とかく一番急行の場合、カールスラントや各国軍の高級将校が乗車している事も多いのでそれを知つてか、片言のカールスラント語や英語で売り込みを図ろうとする抜け目ない者までいるほどだ。

「お姉さん、これ安くするよ、安く。ルーブルOK！ドルOK！マルクOK！」

そう開け放たれた窓の向こうで声を張り上げるスカーフを被った太った中年婦人から、フ란ツイスカは数個のピロシキとふかしたジャガイモを買う。そして、余計な物をさらに売られないようにさつと手をひっこめた後、窓をぴしやりと閉める。

「それは？」

「お夕ご飯。食堂車がなくなったから、こうやって買わないといけないの」

「そうなんですか……」

向かいの座席には、彼女の買ったジャガイモとピロシキが積んで

ある。なかなかおいしそうで、つい目が行ってしまふ。

「ずいぶんと人が戻ったものね…前は、誰もいなかった」

フランツィスカはまだ賑わっているプラットホームを見ながら、そうつぶやいた。

「前？」 ユノーは聞き返した。「前にも、この戦線に居たんですか？」

「居たわ、一九四一年から一年間。あの時期私が来たときは、前線には誰も民間人がいなくて、本当にこの世の終わりのようだった…」

「この世の終わり…」

「そう。あの時期はネウロイが破竹の勢いの侵攻を続けていて、モスクワの陥落も近いとすら言われていた。絶望的な時期だったのよ」

…

「…」

「私は落とされて、その間後方で病院に入ってたの。ちょっとヘマしちゃって。その間に、ずいぶんと変わったみたいね」

「え、撃墜されたんですか？」

「そう。でもよかった。私の居ない間に、だいぶ物事が解決してるみたいで。」

気がつかないうちに、機関車は汽笛を鳴らし、また動き始めていた。駅は遠ざかり、列車は雪の積もった針葉樹林帯へと入っていく。

「私はこういう所に居るのが好き。春になる前の森って、なんか生命の音が聞こえるような気がするの…あなたもわかるでしょ？絵を描いてれば」

「はい、なんだかわかるような気がします…。」

「やっぱり、そうよね…キミも自然の中で、スケッチとかするんですよ」

「はい！」 急に自分の事について話されたユノーは、スケッチブックを開き、そして森の風景をスケッチした鉛筆画をフランツィスカに見せた。「どうですか、この絵？」

「ん…すごく上手いわね。」

そう言って彼女は、次のページにある犬をスケッチした絵を見ようとした。すると、その間から一枚の小さな紙片が滑り落ちた。

「あら…?」

彼女はその落とした紙片を拾い上げ、そしてそこに書いてある気になる文字に目が行った。

クンストシューレ
「美術学校?」

どうもそれは受験票か何かのようだ。

「はい。フォルクスシューレ国民学校を卒業したら、絵を勉強しようと思ってたんです。でも、入学する前に私、ウィッチとして入隊する事になっちゃって…」

そう言つと、下を向いて彼女は黙ってしまった。あまり思いだしたくなかったようだ。

「そうなの…その事、今でも残念に思ってる?」

「…はい、でも、絵を描き続けることはどんな時でも出来ます。たとえ戦争中でも…」

「戦争は嫌い?」

「いいえ、というより…なんだかよくわかりません」

「そう…」

「でも、戦争が終わつたら絵も勉強できるし、それに—」

「それに?」

「戦争が終わるまでになにかわかるような気がするんです。美しいつて、何か?とか。」

「そうね、美しいのは、私も好き。でも戦争は醜い…」

気がつけば日は傾き、オレンジ色の西日がこのコンパートメントにも差し込んできている。夜も近い…。

一九四三年四月三日 カールスラント空軍ヴォルシスキー
基地付近 一〇〇〇

ツアリツインをめぐる戦いにおいて重要な補給地点であったヴォ

ルシスキーも、また多大な被害を受けることとなった。だがそれ以上に、カールスラント軍など各国の軍隊が駐留した事によって、以前の小さな田舎町とは趣を変えている。

そんなヴォルシスキーの各国軍の兵士たちが行き交う道を、ヴォルガの渡船場へ向けて一台の軍用乗用車キューベルワーゲンが走っていく。

「私が隊長……ってことですよね？」

助手席でそう不安そうに話している黒髪の三つ編みの女性が、江守貴子。扶桑海軍の中佐である。彼女は紺色で立襟の冬服にさらにコートも着ているが、それでも寒そうだ。

「まあ、そういう事になったな。上から承認は受けたが？」

ハンドルを握りながら、そうさりと話すのはハンナ・ウルリカ・ルーデル大佐。この基地の指令である。後ろへ一本に垂らした金髪、顔に一文字に入った傷、いずれも勇ましい。

「……」

そして、後部座席で先ほどから何も話さず、ただシャーシユカ刀を抱え瞑目しているのがエカテリーナ・ミハイロヴナ・イエゴロヴア少佐。長い銀髪、閉じた細い目、白く近づき難さを感じさせる顔は、何も語らない。

「そもそも、何で統合部隊が結成されることになったんですか？各国から良い人材を集めるのはいいですけど……」

「ジューコフ元帥の肝煎りだな。オラーシャ軍はどちらかと言うとまあ……いわば他国とつるむ事を好まない傾向が大きい。」

前に北アフリカ戦線に居たインギーから聞いたんだが、あそこだとカールスラント、ブリタニア、ロマーニヤ、リベリオンが互いに協力していると聞いた。だが、この東部戦線ではどうか、カーチャ君？」

「他国の兵士とはここに来るまで話したこともなかった」

「その通り！」そう言ってルーデルは、後ろのエカテリーナを指さして言った。

「元帥はその事を、とても苦々しく思っている。そもそも、オラー

シヤだとそのような事を思いつく軍人すら少ないのだがな…

そのような傾向を排し、連合軍の一国として立派な軍隊にオラーシヤをつくりかえようとする、それがジューコフ元帥の目標だよ。大した愛国者だ！ネウロイどころか自国の悪しき伝統とも戦おうとしているのだからな。

そのための第一歩が、この統合地上攻撃航空団の設立だよ。すべての国のために戦う軍隊、人類のために戦う軍隊。素晴らしいじゃないか！それがここオラーシヤで戦っているという事実こそが自国の意識改革につながるというわけだ。

この戦争は一国の戦いじゃない。すべての国家の戦いというわけだ！」

「よくわかりました」

そう貴子は言った。しかし、まだ納得いかない事があつた。

「しかし、なぜ私が隊長になつたのですか…？」

「元帥はかつての経験から扶桑の軍事力と技術力に大いに関心を持っているらしく、扶桑のウィッチの参加をかねてより希望していた。その理由となつた一九三九年の…そうか扶桑の呼び名では光文十四年だつたな…ノモンハン事件を知っているか？」

「はい、知っていますが…」

「大いに結構。オラーシヤ側では、ハルビン・ゴール事件ともいう。私も地上攻撃において、その資料を大いに参考にさせてもらった、そして、それ以上の成果を挙げている」

そうルーデルは得意げに語つた。

「そして今大戦でも、欧州の扶桑軍ウィッチは大活躍を続けている。君もリバウではけっこう鳴らしたそうじゃないか？」

「いえ、めっそうでもない…」

「まあいいさ。謙譲は扶桑人の美德らしいからな。というわけで今回の統合部隊結成に呼べないかと思ひ、私は何人か欧州で活躍したウィッチ達にオファーを送つた。ミオ・サカモト、ジュンコ・タケイ、トモコ・アナブキ…他にもずいぶん居る。

しかしことごとく断られてしまった。全部先約があったらしくね。結局爆撃が本職の方がいいと思って、君に決めたわけだ？納得か？」

ルーデルは貴子の方へ向き直り、ほほえみを見せた。

「はい、わかりました……」

貴子は納得せざるを得なかった。これ以上の解答はおそらく得られないだろう。

「さてカーチャ君。ハルヒン・ゴール事件について、少し君が説明したまえ」

「ハルヒン・ゴール事件は、一九三九年五月から、九月にかけて帝国軍、ならびに扶桑軍がネウロイと国境付近の平原で武力衝突を起こした事件だ。ゲオルギー・ジューコフ閣下は当時現地の指揮官で、扶桑軍航空部隊の援護を受けて敵を排除した。祖国を守った功績でジューコフ閣下は金星勲章を授与された」

そのように、事務的な態度でエカテリーナは答えた。そのつれなさに、何か冷たいものを感じた貴子は少々怯え、何も言わずに下を向いた。しかしルーデルは静かに重苦しく、この辞書のまる写しのような言葉に付け足した。

「公式にはそうなってる……しかし、実際にジューコフが貰ったのは勲章ばかりじゃない。不手際を理由とした中央アジアへの左遷もだ。」

実際には彼が処刑される可能性だって十分あった。扶桑のスパイとか、なんとか理由をつけてな。だが軍の長老達のお気に入りだった彼を消すのはまず至難の業だ。そのおかげであの大粛清の時代に生き残れたのだから。」

そう聞いて、貴子は急に恐ろしくなった。この国の恐ろしい部分に、初めて触れてしまったのだから。

「ひどい……ネウロイと戦うためにするべき事をしただけなのに……陥れた犯人は誰なんですか？」

「今は言えん」しかし、ルーデルは振り返って言った。「だが、いずれ君もわかるはずだ」

広いヴォルガ川を渡るには橋ではなく、フェリーに乗るしか方法はない。車両を乗せられるフェリーは本数が少ないので、何時も混み合う。

貴子、ルーデルとエカテリーナを乗せた軍用乗用車キューベルワーゲンもまた、その車列に混ざっていた。

「列車の到着は何時になる？」

ヒトマルヨシマル
「一〇四〇」

エカテリーナは時刻表も見ず、さらりと言ってみせた。

「そうか。あいつら二人は少々待たせる羽目になるな…」

「あいつら二人って誰ですか？」

突然貴子は身を乗り出し、ルーデルの方を向いて問うた。

「一人は病み上がりで、私のスオムス以来の部下だ。もう一人は新入り」

そう聞くと、急に貴子は急に楽しみになってきた。入りたての新入りと言うのは、いつでも純粹でかわいい。

「新入りかあ…どんな子かな、かわいい子だといいな…」

「そうか。私もそう思うぞ。年下好きなもんでな」

ルーデルも口角を崩さざるを得なかった。しかしエカテリーナは、全く興味もないようだ。やりずらそうに瞑目し、ただ下を向いて押し黙っている。

「…。」

第2章 始まりの Daylight

一九四三年四月三日 ツアリツイン臨時駅

一一〇〇

激戦地となった、工業都市ツアリツイン。家も工場も駅も全くの燃え尽きた廃墟でしかない。

しかし、人は動いている。生きている。以前の駅の北方にできた新停車場にはホームも駅舎もなく、ただの操車場にも関わらず人は線路わきに、あるいは線路の上にすらもこつた返し、貨物は山と積んでいる。

南へと向かう列車を待つ者も居れば、これから来る人々を待つ者も居る。無論、最前線で軍都のこの町。その半分は各国の軍人だ。

軍用自動車を乗り入れさせ、迎えに来た軍人も居ないわけではない。各軍の高級将校か、実入りも待遇もいいウィッチ達だ。彼らはみすばらしい身なりの民間人や、それと大差のないオラーシャ兵から羨望の目を投げかけられ、一方の軍人たちはその人ごみを冷やかに眺めている。

あまつさえ一人の女性大佐などは、手足を車の外側に投げ出しさらに左手に火のついた紙巻煙草を持って所在無げに線路の方を見ゆり、いつ待ち人来るかとばかりに考え込んでいる。だが、汽笛の音は未だもって聞こえない。ただ歩き続ける人々が見えるだけである。しかし暇で仕方がない、おまけに寒い！同行の二人は未だもって何もしゃべらない。仲良くやっていけるんだろうか？いい加減自分が言い出したとはいえ、今更ながら不安になってきた。いったいこれから…とかぼんやりと考えごとに耽っているうちに、左手の煙草は誰かにすつとかすめ取られてしまった。

「ああ…最後だったのに」

そう実に残念そうにつぶやいて後ろを向いた彼女の目に、もはや

犯人は映らなかった。彼女は騒ぎたてもせず、ただ大きくため息を吐き、大きく伸びをする。

その顔に大きな傷がついた女性大佐こそ、ヴォルシスキー基地司令のハンナ・U・ルーデルだ。

「なあ、カーチャ。サモワール無いか？コーヒー飲みたい」

「残念ながら携帯していない、それにサモワールはコーヒー用には使えません」

まるで役所の窓口のような事務的な口調でまた、さらりとエカテリーナ・イエゴロヴァは答える。もはやこれが彼女の性格によるものだという事は百も承知だから苦笑いするしかない。

「冗談だ、つまり…ネタ振ったんだよ」

実際にはネタ振りにすらなっていない、たとえそうだとしても下手糞極まりないが。

「コーヒーですか？私も大好きです」

しかし世界は広いものである。この下手糞なネタ振りに乗ってくる物好きも居るものなのだ。乗ったのは扶桑海軍のウィッチ、江守貴子である。

「おお、貴子もそうなのか？」

「だって、夜鍋仕事に役立ちますもの。そうじゃない時でももちろん、飲みますが」

「飲み方の好みはあるか？」

ルーデルはまるでよく勘違いした妙な喫茶店にいる軟派なマスターのようなのだ。

「あ、そこまで言われるとよくわからないんですけど…」

「…そうか、扶桑じゃそこまで選べる店は無いか」

「『ブрендコーヒー』しか飲んだ事ありません」

「なんじゃそれ？」

「…私も良くわかんないんです」そういうと、彼女は恥ずかしそうに俯いたつきり黙りこくってしまった。

「…こつちがしゃべりすぎたかな」

そうひとりごち、左手を口に当て、まるで煙草を吸うようなしぐさをした。本人は先程の窃盗事件の件はすっかり忘れていて、煙草が有るものだと思っていたが…。

「あ、無いんだった」

その実に滑稽な仕草を、通りすがりの兵士が笑った。

「そういえばスオムスにいたころ、ブリタニアの友人から『ヒベルニアン・コーヒー』ってのを教えてもらったな」

「…それも飲み方なんですか？」

貴子はまだ俯いたままだ。

「ああ、そうだ。とても身体が温まるぞ。冬期飛行向けだ。」

「それ、とつても美味しいんですか？」

「もちろんだとも。今日みたいな寒い日に飲むと特にな」

そう聞くと、興味を持ったのかおもむろに貴子はその顔を上げた。
「ぜひ作り方を教えてほしいのですが？」

なぜだか良くわからないが、妙に真剣に彼女はルーデルを見つめている。そんな彼女を見て、少し笑いつつもルーデルは続けた。

「いいか？簡単にできる奴を言うぞ。グラスに熱いコーヒーを用意して、そこに砂糖を入れるんだ。それから温めておいたヒベルニアン・ウイスキーをだいたいグラスの底に少しほど、つまり…ほら、あの扶桑酒を入れて飲むあの小さいカップ…何て言うんだっけ？」

「お猪口ですか？」

「そう。お猪口だな。あれに一杯分くらい入れてグラスで混ぜる。それでその上に生クリームをずいぶん和山絞り出して浮かべるんだ。これで完成。」

と、得意そうな顔でルーデルは説明を終える。

「わあ…基地に帰ったら夕方あたりに作ってみます。でも、ウイスキーってお酒ですよね？」

「そうだが？」

「それ飲んでからストライカーで飛んだら、危なくないですか？」

「まあ…むろん、弱い奴はな…だから帰還してから飲む事にしていくぞ。そりゃ中には強い奴が居て、二杯も飲んでから平気な面して爆撃任務をこなした奴が居たな」

「それはすごいですね…ところで、エカテリーナさんさつきからしやべりませんね」

「そういう奴だからな」

しかし、一応後ろを向いて確認する。

「寝てやがる」

早春の空の下、蒸気機関車が汽笛をひっきりなしに鳴らし、ドレンを勢い良く吹きながらゆっくりとツアリツインの臨時駅に入ってくる。線路上にいた人々は左右へと蹴散らされ、ゆっくりと進む列車の通過をただ見つめる。貧しい人々に、この列車はまず手が届かないだろう。これが昨日モスクワを発った、そしてフランツィスカ・ランゲとユノー・ボイスの乗る一番急行である。

機関車はさらに減速し、やがて停止する。乗客たちはステップを大きな荷物を抱えて降り、そしてただバラストがあるだけの乗降場に降り立つ。およそ一日近くをかけた旅は、ここで終わりだ。

一人ひとり、降りる乗客の中に、ルーデルは見慣れた顔を見た。

「フラン！」

「ルーデル大佐！」

そして彼女は人波をかき分け、そして両手でしっかりとフランを「確保」した。久しぶりの再会に二人は抱き合いしばらく動かず、無言のままに感動を分かち合う。それはまるで石像か何かのようだった。

「フランツィスカ・ランゲ大尉だな」

その間に入ったのはのはつかつかとやってきたカーチャだった。抱擁を交わしていた二人はとたんにはっと我に返る。そして、その声の主の方へ向き直る。

「あ、はい。そうです。よろしく願い…」

そう言つて右手を差し出したフランを遮つて、カーチャは無言のままに敬礼をする。フランは一瞬驚き、だがすぐにその右手で少々苦笑しながら敬礼を交わす。そしてそのまま、手を戻しカーチャはまた直立不動の無表情で、彼女の無言の世界へと戻つてしまつた。

フランは戸惑つた。殆どしゃべらず、笑顔も見せない彼女にいたいどう接すればいいのだろうか？彼女には、苦笑いすら通じないようだ。今まで会つた事のないタイプの人である。気まずい沈黙が続く。

「ああ、すまん。そいつは性格的に無口なんだ」

横から、少々の苦笑込みでルーデルが補足する。確かに、この性格に慣れるのには時間がかかるのは間違いないだろうが。

「は、はあ…」

「まあ、仕方ないね。代わりに私が紹介するか。この三つ編みの扶桑人が、江守貴子中佐。部隊長をやってもらつてる。」

「よろしく願ひします。」

と言つて、しとやかに深々とフランに向かつて頭を下げた。それから、改めて敬礼する。

「まあ、この通り丁寧で親切な奴だ。頼りにするといい。で、こつちのそつけない奴がエカテリーナ・イエゴロヴァ少佐。カーチャと呼んでやれ。」

「…。」

彼女はただ、何も言わず冷たい銀色の目線でフランの方を凝視しただけだつた。

「まあ…そんな奴だ。慣れるまで大変だろうがな。ところで…例の新入りは？」

「さあ、着いたときには起きたんですが…まだ支度が済まないのかしら…」

その時、後ろで誰かが大声を上げた。三十代位の男の声だ。

「あつ、危ないよ嬢ちゃん！手に掴まれ！」

そこに居合わせたカールスラント兵の声だ。何かと思い、そこに居た四人全員が、またその他の人々も皆、その声の方を向く。

一人の少女が、兵士の手を借りながらふらふらと危なっかしい足取りで客車のタラップを降りている。目は開いているのか閉じているのかもわからず、その視線は足元ではなく虚空を泳いでいる。とりあえず…死ぬほど眠そうだ。

「ユノー！歩きながら寝ちゃダメ！目を開けなさい！」

あわてて彼女の姉代わりになったとも言つべき、フランが落ちそうになっている彼女を支えるべく駆け出した。

「あらあら、おねむだったみたいね」

頬に手をやり、いくらか困ったような顔で貴子はそのいささか抜けたところのある新人を見つめた。

それにしてもよく見ると、彼女の身なりのすべてがおかしい。規格帽は妙に後ろへずり下がっているし、ボタンは完全に掛け違えている。トランクからは荷物がはみ出し、地面を引きずりそうだ。ズボンははき忘れなかっただけマシだろうか…。まるで喜劇映画の主人公のような彼女を見たルーデルは、流石に笑わざるを得なかった。

「こいつぁ…ほ、本当におかしな奴だな、おい！」

そう言つて、腹を抱えて大声で笑いだした。一方でカーチャは、この光景に流石に何も言えなかった。ただ呆然と、慌てるフラン、困った顔の貴子、笑い転げるルーデルを眺めるだけだった。

「おい、どうよ、カーチャ？おもしろいか？おもしろいか？こいつは傑作だろ！」

「…わかりません」

だが一番困惑しているのは誰か？間違いない、それはユノーが落ちないように支えている、たまたま居合わせたカールスラント兵だろう。歩哨か何かの帰りだったのか、MP40短機関銃を肩にかけたまま、こうして両腕で彼女の左腕を抱え、タラップから下ろして

いる。つくづくその兵士は思っただろう。こいつは一体何なんだ？
同じカールスラント兵にしたって、一体全体どこの隊だ？と。そしてまあ、間違いなく見ていた仲間達に笑い物にされるだろう、とも…。

やがて彼女と同じ隊だ、と思われる女性士官が駆けつけて、彼女の右腕を抱えた。二人は息を合わせ、そして何とかユノーをタラップから地上へ下ろす事に成功した。

「あ…上官の方ですか？」

彼女がその女性士官に肩を支えられるのを見て、彼はそう尋ねた。
「はい、そうです。第二急降下爆撃航空団大尉のフランチスカ・ランゲであります」

そう言つて、右手で軽く彼女は敬礼をした。つまり彼女はウィッチだったのだ。とたんに彼の背中に緊張が走った。そしてまるで閲兵でもされているかのように銃を下ろして背筋を伸ばし、顎を引き、ずいぶんと緊張した口調で早口にしゃべった。

「はっ！自分は陸軍第七歩兵師団、ゴットフリート・ビュルガー伍長であります！貴官に協力出来た事、誠に光栄に存じます！」

「そんな硬くならなくていいのに…でも、ありがとう。」

そしてちよつとウィンクし、彼女は去つて行つた。肩を支えている年下のウィッチに、「いい加減起きなさい！」などと言いながら…。

一方のゴットフリートはまだ身体に電気が走り続けているようであり、しばらく身動きが取れないでいた。気温摂氏五度の屋外に居るというのに、身体全体が汗でびっしょりだった。そして、なぜか世界全体が止まって見えた。

だがしかし、やがて正氣に戻つてみれば、もう情けなくて仕方がなかった。後ろから聞こえる仲間達の囁し声。分隊長殿の完全に呆れかえった呼び声。そして自分を指差すオラーシャの貧民共…線路の反対側のオラーシャの歩哨まで腹を抱えて俺を笑つて居やがる…本当に、注目されるというのはひどいもんだ、情けない事柄なら特

に。

「…今日は厄日だ」

そうつぶやき、彼はとぼとぼと分隊の方へと戻っていった。

内 一一三〇

一九四三年四月三日 ツアリツイン市

「初めての長旅だもの…疲れて当然よね」

キューベルワーゲンの背もたれに寄り掛かりながら、すやすやと寝ているユノーに、貴子はそつと自分の着ている濃紺のコートを掛けた。そして、優しい目で彼女を見守る。

「まったく、いつまで寝てるの…これから配属だって言うのに」

彼女を挟んで左側、フランはそう、どことなく呆れた口調で貴子に言った。

「でも、私達より年下だし、こうしているのだって慣れていないもの、仕方ないわよ」

「そうは言ったって、ここは戦場ですし。あまつさえ、巡回中の方にも迷惑かけて。本当にもう…」

「ま、いいから死なせとけ。死体の一丁上がりって事は確かだろ？」
運転席からだしぬけに、妙に愉快そうな声が聞こえた。ルーデル大佐だ。「冗談のつもりで言ったのだろうが、とたんに二人とも黙りこくる。」

「…あれ、すべった？」

いくらなんでも黒過ぎる冗談と、それに加えてさらにダメなりアクシヨンに、流石の二人も付いて行けなかった。重苦しい沈黙が後部座席を覆う。

「あ、あの大佐…死体ってのはちよつと…」

貴子がだいぶすまなそうに、小声で言った。流石にこんなブラックジョークについて行く気概は無い。するとルーデルはだしぬけに後ろを向き、語気強くこう返した。

「あ？何だ？扶桑の海軍軍人は冗談の通じる相手だとは思っていたが、これは冗談の内に入らないって？それともネタが悪いって？」

「…前線では冗談になりません、それはシリアスな問題でしかない」
貴子にフォローをくれてやったのは、また瞑目して不動のままだった助手席のカーチャだ。もう何年もこの戦線で戦っている彼女の妙に重苦しいその口調は、どんなフォローよりもより説得力があった。これにはルーデルも反省し、少々顔を曇らせながらまた、顔を前方へ戻した。

「そ、そうか…すまなかったな」

「江守中佐」

「あ、江守“さん”で構わないわ。あなたの事も“フラン”って呼んでいいかしら？」

「ええ、もちろんかまいません…ところで、扶桑にはサムライって言うのが居るんですよね？」

「もちろん。実は私の家もそうなのよ」

「え、そうなんですか？軍人になったのも、それがきっかけ？」

「そういうわけじゃないわね。むしろ“そうしなきゃならなかった”と言えいいかも。つまり、サムライって世襲なのよ」

「こっちでの騎士みたいなもの？」

「そうね。まさにそれ。もっとも、軍人になれるのはサムライばかりじゃないわ。でも、私はあまりなりたくなかったかも。そう生まれたから仕方ないかもしれないけど、でも…むしろお料理でもしてたかったわね。」

そう言つて、焼け野原の街並みを眺めながら、彼女はふっと溜め息をついた。

「早く平和になってほしいわね…そのためにこうやって戦っているのかも知れないけど。フランは何がきっかけでウィッチに？」

「そうですね、私はやっぱり…」

そこまで言いかけたところで、前に居たオラーシャ軍交通整理兵

が赤い小旗を振って停止の合図をした。それに気づいたルーデルはブレーキをかけ、車を止める。

「おい、何だ…スピード違反かそれとも手荷物検査か？カーチャ、ちよつと降りてあのP腕章に聞いて来い」

「諒解」

ルーデルは『P腕章』と言ったが、実際にはPではない。単にルコヴォストヴォⅡ管制の略のP（エル）を読み間違えているだけである。だがそんな細かい事は気にせず、つかつかとカーチャはその兵士に近寄り、そして彼と二言三言短い会話を交わした。背丈や顔から見るに彼は十五、六の少年のようだ。そしてまた早足で車に戻って来た。

「不発弾処理です」

「ふーん、なあるほどねえ。どんだけかかることやら…」

激戦地であつたここツアリツインには、着弾しながらも爆発しなかつた砲弾がごまんとある。それらを除去しない事には、町の復興どころか道を歩く事すらおぼつかないのだ。それで、工兵たちがこつやつて日夜、不発弾の爆破処理を行っているのである。

「前にも見たけど、怖いよね、不発弾処理って…」

貴子が向こうに見える作業現場を見て、少々怯えながらつぶやく。「どこで見たんですか？」

「訓練生時代に、一回見学させてもらつたわ。漂着機雷の爆破処理を。ちよつとでも触れると爆発しちゃうでしょ？そう考えると、怖くて怖くて…爆撃の時は爆発するのは自分の下だから別に怖くは無いけど、機雷処理はそばに人が居るのよ？もし今爆発したらどうなるんだらう、って考えると怖くてたまらないわ」

「私は初めてです。どんな事をするのか、ちよつと気になりますね」
そう言つてフランはそのあわただしい様子を、ドアにもたれかかつて眺めている。一歩間違えば大惨事と言う事も頭になく、妙に気楽そうだ。

「…見世物じゃないわよ、あんなの」

目の前で、工兵の隊長と思われる恰幅のいい男が、大声で何か三回、それぞれ違う方向へ叫んだ。オラーシャ語はわからなくても、何が始まるのかはだいたいわかるだろう。

「爆破します」

「わかってる！」そして後ろの三人にも聞こえるように大声でこう言った。「口を開けて耳をふさいどけ！鼓膜が破れないようにな」起きている二人はすぐにそれに従った。特に貴子はギョツと手を押しつけ、目まで閉じているのがフランにはわかった。相当怖いようだ。そしてさらに、真中で寝ているユノーの頭に両側からぴったりにくつき、彼女の分まで耳をふさいだ。

「来るぜ…三、二、一…！」

とたんに、ものすごい勢いで土煙がそこら中に舞い、耳をふさいでも両手をすり抜けるほどのすさまじい轟音が響いた。そしてその後、小石や塵あくたの類がパラパラと降ってきた。…どうやら、周辺の残骸まで巻き込んだらしい。

「あいつら…カールスラントの工兵ならもうちよつとマトモにやるわな」

呆れたような顔でルーデルはその様子と、あたふたする工兵たちの姿を眺めた。幸い死傷者は出なかったらしいが、その光景だけ見れば十分大惨事である。

その頃、なんだか分からないがすごく響く音が聞こえたような気がして、それまで夢の中だったユノーはうつすらと目を開けた。彼女の視界には舞う土煙が見える。何なのか、よくわからないままに無言で彼女は周りを見渡す。

「あら、おはようさん」

誰かの声が聞こえる。その声が鳴る方へ、彼女はゆっくりと視線を動かす。フ란ツィスカ大尉だろうか？いや、全く違う。誰だろう？ついさっき見たような気もするし、見た事もないような気もす

るが……。自分が全く知らないところに居る、彼女はその事にひどく驚いた。そして、大声で叫んだ。

「こ、ここはどこですかー！？何があつたんですかー！？」

「ようこそ、東部戦線へ。ボイス一等曹長」

「……とうぶ、せんせん……？」

「ああ、そうだ。起きないもんだから死んだかと思つたぞ。私はハ
ンナ・ウルリカ・ルーデル大佐だ。よろしく」

そうやって、きちりと敬礼を向けた。

「よ、よろしくお願いします……」

なんだかよくわからないままに、ユノーも敬礼を返した。

一九四三年四月三日 ヴォルガ川のフェ

リー上 一二〇〇

ヴォルガ川のフェリーを運航するのは、カールスラント、オラー
シャ両軍の工兵部隊だ。車両用フェリーはそれぞれカールスラント
が二隻、オラーシャが一隻ずつ、早朝から二〇時まで休むことなく
揚陸艇で往復している。それぞれの船には小型車なら四台、トラッ
クなら二台が載せられる。航走中に車両が流転しないように甲板に
タイヤを鎖でつなぐが、その作業もカールスラント軍の工兵たちは
手際よく次々と済ませる。

「まったく。明日からは寝坊は厳禁よ？ユノー。」

「はい。ごめんなさい……」

フランツィスカに叱られて、ユノーは少々小さくなっているよう
だ。

「でも今日はいいわ。旅の間全然寝れなかったんだから。のんびり
していいわよ。まあ、これからはしっかりしなさいよ？」

「おっ、厳しいね、フラン姐さん」

そうやって後ろからルーデルが二人を囁す。貴子もまた、そんな

二人を微笑みながら見守っている。無関心なのはカーチャだけだ。

「固定完了！」

工兵が大声で操舵手に知らせる。間もなく、出港を知らせる鐘が鳴る。市民達がどやどやと駆け足で乗船してくる。今日もまた、満員のようだ。

「左右良し、後方良し、渡し板上昇確認！出港！」

そして揚陸艇は、ヴォルガ川の流れに揺られながら船着き場を後にした。

「とっても広いですね、この川……」

ユノーは身を乗り出して、そのまるで海峡と勘違いしそうな風景を見つめる。

「そうだろう？なんてったってオラーシャどころか全欧州一の大河だからな。ライン川とは大違いさ。私は何度もここに来たが、ああ、いつだってでかい川だなあって思うよ。いつだってね。」

「ルーデル大佐はずっと前から東部戦線に居たんですか？」

「そうとも。一九四一年の夏からずっとな。その間、色々な用事でこの川を渡ったりさかのぼったりした。そのたびに、この川沿いは様々に変化していてな……。ほら、見る。あれが私たちの基地のある町、ヴォルシスキーだぞ」

「ああ……」

ユノーはそのぼんやりと浮かぶ姿をじつと見つめる。どこに基地があるのかは分からないが、とにかく今日から私はここに住む……そう考えるとやおら緊張してきた。

「さて」ルーデルは川の方から、一気に車内の方へと向き直った。

「貴子、自己紹介を兼ねて基地や部隊の事をユノーに話してくれないか？」

「はい、では」

「私は扶桑海軍中佐、江守貴子です。よろしくね。」

ユノーさんがこれから行くのはヴォルシスキー基地。私たちの第三〇一統合地上攻撃航空団、通称アサルト・ウィッチーズが配備されている所です。」

「第三〇一統合地上攻撃航空団？」

「そう。それがあなたのこれからの部隊よ。世界各国からウィッチが集まっているの。仲良くしてね。」

「は、はい……」

「そして隊長は私。何か困ったことや知りたい事があったらいつでも尋ねていいわよ。」

「あの、さっそく聞きたい事があるんですけど……」

「なあに？」

「あの……ルーデル大佐が隊長じゃないんですか？」

「ルーデル大佐は基地司令よ。他にもこの基地には色々な部隊があるの。カールスラントの地上攻撃部隊、輸送機隊、整備部隊……そのすべての部隊に命令できるのが、ルーデル大佐。」

「そうなんですか」

「後で基地に着いたら、中を案内して回るわ。それから……たぶんだけど、歓迎会もあるわよ」

「本当ですか!？」急に彼女の眼が輝いた。

「ええ。残った人たちが準備してるって聞いたわ。ご馳走もあるかも。」

「そ、それは……うれしいです!」

「でも明日からは訓練よ。それが済んだら、実戦配備。前に座ってるエカテリーナ・イエゴロヴァ少佐の指揮に入るの」

彼女の名が呼ばれたにも関わらず、カーチャは一瞥もしないで、ただシャーシユカ刀を抱えているだけである。また瞑目しているのかもしれない。

間もなく対岸の船着き場が近づき、そして船首を陸側にして揚陸艇は着岸する。間もなく渡し板が前に開き、甲板に立っていた市民

達は一斉に船を降りる。全員降り切ると、今度は工兵がやってきて先程とは逆に、車両を留めていた鎖を外す。この船着き場の担当はオラーシャ軍だが、カールスラントの工兵たちが鎖をつないだのと同じくらい、作業は早い。

固定を解除した事が誘導係の兵士に呼び掛けられると、彼は手に持った緑色の旗を振って車両に発進合図を出す。彼は去っていく車両に一礼し、間隔をおいてまた次の車両を誘導する。ルーデル達のキューベルワーゲンも、発車許可が出たようだ。

「よし、みんな、行くぞ」

そう言っ、て、ルーデルはギアを入れ、アクセルを踏み込む。そして小気味良い音を立てて、渡し板を越える。

上陸したここは、まさにアサルト・ウィッチーズのある町、ヴオルシスキーだ。

第3章 黄昏時と空の雲 Ⅰ

一九四三年四月四日 モスクワ中央区、陸軍省ビルディング 〇九〇〇

モスクワの中心部で、クレムリンや赤の広場があるキタイゴロドからは少し離れたこの地区の、モスクワ川沿いにひととき重厚な、まるで鉄筋コンクリートで作られたルネサンス宮殿のような建物がある。ここが陸軍省のあるビルディングだ。

その窓から見ゆれば、オラーシャ帝立図書館やプーシキン美術館などの中心部にふさわしい、荘厳で立派な建物が並んでいるのが分かるが、一か所だけなぜか空き地のままの巨大な土地がある。この不思議な空白は、オラーシャ政府がクレムリンに代わる新たな政府中枢として建設中だった、オラーシャ新宮殿である。ガリアの建築家、ル・コルビュジエの超近代的で独特なプランが採用されたこの壮大な計画は、本当であれば今頃そろそろ鉄骨が姿を現し始めるはずだったのだ…。

しかし、実際にはまだそうなっていない。戦争によってその工事はストップし、今になってもこうして、古い建物をわざわざ解体してまで遂行したこの野心的計画は土台部分のみにとどまっている。また戦争が終われば、この工事は再開されるのだろうか？

さて、そんな風景が窓から望める陸軍省ビルディングの最上階で、一人の男が受話器片手に何やら話していた。帝国軍最高司令官代理、ゲオルギー・コンスタンチノヴィチ・ジューコフ元帥である。

「ヴォルシスキー基地かね？ジューコフだ。司令に繋いでくれ。」
『了解しました』

電話はすぐに繋がった。

『もしもしー、何か連絡ですかジューコフ將軍？』

ずいぶんと間延びした、ルーデル大佐の声だ。

「あー、俺は元帥だが…。」

『それはすみませんでしたー。ジューコフ「元帥」ですね。昇進おめでとうございますー』

しかもめんどくさそうだ。到底司令官向きの人間じゃない事はすぐわかる。

「失礼やりやがって…で、そっちに補充人員が届いたと聞いたが」
『それなら昨日届きました。お上品でピカピカの玩具のような奴がね』

「ふむ。遊んでやれ。」

『そりやもちろんかと？』

「なるほど、一ヶ月以内に実戦配備出来るようにしろ」

『諒解…で、うちのハイデイはいつ返してくれるんです？』

「ああ、悪い…今日返すよ、すまん」

「今の電話はどなたでありますか」

突然の声に気付き、だしぬけにジューコフは後ろを向く。知らぬ間にそこに立っていたのは“ハイデイ”、あるいはアーデルハイト大尉であった。ルーデルの補佐官である彼女に、ここ一カ月の間、ずっとこのモスクワに連絡員として駐在してもらっているのである。まあ、半ば強引ではあったが。

「ああ、ルーデルからだ。新人が予定通り着いたそうだ」

「はあ、では自分もこの人質生活からやっとな解放される、という事でありますね」

「人質かいな…」

彼女の言葉は丁寧ではあるが、その中身は毒がぎっしりである。本当に上官そっくりだ。

赤い絨毯が引かれた陸軍省の長い廊下を歩きながら、二人は話し続ける。

「新人に関する書類を、お読みになられたかと」

「オラーシャ語版に軽くざっと目を通した。実戦経験のない一通り飛んで演習が上手くこなせるだけの奴を送り込むとは、カールスラント空軍もどうかしているんじゃないか」

と、率直な疑念をジューコフはアーデルハイトに述べた。

「確かに、その通りでありますね。ですが、どんなエースだって最初は新兵だったのですよ」

「まあ、そう言われれば……」

「それに、折角送ったウィッチがすぐ放り出されて帰ってきては、我が国の航空省だって面子が立たないと考察できますから。貴官もお察しとは思いますが、統合部隊は政治的な存在でもあるのですよ」
「それは私も同感だ。ところで、もうあちらへ向かう準備は出来ているか？」

「はい、今日中にも発つ用意はしてあります」

すると、ジューコフはその懐から嚴重に封印がされた書簡をアーデルハイトに手渡した。

「じゃあ今がいいだろう。本当は君にもゆっくり話したかったのだが……」

「……？何でありますか？」

「いや。何でもない。後で話そう。とにかく、今はそれをルーデルの所へ持って行ってくれ」

「諒解」

「それでは。良い旅を。」

そう言うつとジューコフは、足早にどこかへと去ってしまった。そして、手に書簡を持ち釈然としない顔で立つアーデルハイトだけが残った。

「何なんだよ……いったい」

その書簡は一目見たところその封印は一重では無いことが分かる。「極秘」と書かれたスタンプは押されていないが、おそらくこれは重要でない事を偽造するため、本当はそれどころではなく、おそ

らくスタンプでは足りないくらいの超極秘だろう。あのジューコフの焦り具合と真剣な顔。そして謎めいた言葉。間違いなくそうだ。「そうなりゃ…こうしちゃ居られないな。急がないと」

気がつけば彼女も焦っていた。そして書簡をポケットの奥深く隠し、陸軍省の出口へと向かった。その間中ずっとポケットに手を入れながら…。

入った時に預けた外套を慌ただしく受け取り、受付嬢の驚いた視線を尻目にさらに彼女は歩き続けた。ただ目は前だけを向き、一回も振り返りはしなかった。荷物の置いてあるホテルまではちよつと路面電車に乗る必要のある程度の距離だったが、なぜか乗る気にはなれなかった。

「とんでもない事になるかもな…」

一九四三年四月三日　ヴォルシスキー、連合軍統合航空隊基地司令棟　日の入り直後

既に日光は闇に征服され、空は最後の抵抗の生々しい傷痕としての薄明かりに満たされる。偉大なる魔王としての夜の帳が現れようとする今。それこそが神聖な時であり、現実の世界と魔法の世界が目の前で交錯するスペクタクルをどこまでも広い頭上のスクリーンに見る事が出来る。

鳥は哀歌を口ずさみながら、塹へと帰っていく。夜の何を恐れるか？それは我々にもわからない。だが、ただ恐ろしさだけは感じる。だがその哀歌は、また服従した者が征服者に投げかける偽りの賛歌にも聞こえないだろうか？新たな世界が、また作り出される姿のような物を我々はこの風景に見るのである。

この薄明るい空。霸王の最後の栄光。この創玄で偉大な一瞬を、神聖と言わずして他にどう言おう？

この時を待っていたように、ヴォルシスキー基地司令部棟の隅に

ある薄暗い祭壇では、謎めいた儀式がしめやかに始まる。

「ユノー・ボイス。大地の為に頭を垂れよ」

彼女は片膝をついてルーデルの前に跪いている。

「無言のままに大地への賛歌を、そして庇護への感謝を」

彼女は下を向き、何も言わない。外界からは遮断されたこの部屋には、気流の流れもない。ただ僅かな灯りとしての蠟燭だけが、ゆらめいている。ただ二人だけ。神聖な、決して侵されてはならない、他言も認められぬ秘密の儀式である。

「この世界のすべての、護るべき義務のある者達への誓いを述べる。一言毎に私に続け」

外の音も、内の音も何もない。ただ、神聖な言葉達が現れては無音へと戻る。それらはこの秘密めいた部屋の壁に、幾度となくこびりついてきたのだろうか？

「自分は」

「自分は」

「我ら連合国全てに」

「我ら連合国全てに」

「常に忠誠を尽くし忠実に仕へ」

「常に忠誠を尽くし忠実に仕へ」

「勇敢かつ従順たる兵士として」

「勇敢かつ従順たる兵士として」

「如何なる時もこの神聖たる宣誓を以つて」

「如何なる時もこの神聖たる宣誓を以つて」

「我が身を捧ぐ事を誓ひます。」

「我が身を捧ぐ事を誓ひます。」

忠誠宣誓が終わると、また部屋は静かになった。部屋の中は非常に冷たく、すべてが凍りつきそうである。しかし、ユノーは緊張のあまりか、その額には汗がにじみ出していた。

「ユノー・ボイス。頭を上げよ」

無言のままに、彼女は顔を上げ、ルーデルをじっと見つめた。するとずるりと両手で持った中世的な長剣を抜き、その刀身をきらりと光らせた。それを見て、彼女は一瞬「ひっ」と急に息をのんだ。そして、恐怖につい顔をひきつらせた。

「恐れるな…ただ肩に当てるだけだ」

そう聞き、一瞬ホツとした。ただ内心では恐怖を覚えた事を少し恥じていた。赤面しそうではあったが、必死に平常心を保った。そしてまた元の神妙な気持ちに戻り、前よりもより真剣な目つきで、ただルーデルを見つめた。

「いいだろう…では」

そして一回の咳払いの後、彼女はユノーの右肩に刀身を置き、そして述べた。

「忠義、公正、武勇を以つて之に仕へよ」

という、短い訓令を。そして長剣を鞘に戻し、まるで空に掲げるかのように、あるいは空へ祈るかのように両手でつかんで上を仰いだ。そして誇り高く、天に言い聞かせるかのように口を開いた。

「ユノー・ボイス。そなたを連合軍統合部隊の、忠実な兵士として宣言する！」

そして、その神妙で厳しかった顔が、急に緩んだ。すべては終わったのだ。神聖なる誓約が今ここに結ばれ、祝福さるべきユノーはそこに片膝をついている。

「おめでとう、ユノー。今日から君もこの部隊のウィッチだー」

第4章 黄昏時と空の雲 2

一九四三年四月三日 ヴォルシスキー、連合軍統合航空隊
基地講堂 一六三〇

「残念ですが、アトキンス博士。それは出来ません。我々の倫理規定に反するのです」

しかし彼は驚くほど冷静であった。何があっても動じない、と言わんばかりに腕を組んで仁王立ちしていた。

「なるほど、それが答えか、ハリー？」そしてそのハリーと呼ばれた思考機械を問い詰めた。「だが何故かね？その倫理規定の妥当、かつ、論理的な意義を説明してくれ」

「それはあなた自身と、あなたの存在に深刻なダメージを生じます」
「ふむ」博士は思った。つまり今、ハリーは自分を迫り来る危機から救おうとしているのである。それは彼が課せられた、機械としての第一の使命なのだから。だが、彼のおせっかいはもはやどうでも良かった。むしろ、障害でしかなかった。自分は今、科学の歴史がまさに大きく変わろうとしている大発見に立ち合おうとしているのだから。

「わかった。だが、黙ってる」

「出来ません」

「何故だ！？」

「私の絶対任務はあなたを守ることであり、それを遮ることは不可能です。もしあなたが私の警告を無視するのであれば、私は自動的に論理矛盾を生じて機能を停止します。そうすればあなたの生命維持も保証出来ません！」

「邪魔をするな！」

「おやめ下さい！あなたがこれ以上強行するなら、私も物理的阻止手段を取らざるを得なくなります！」

『黙れ!』

博士は叫び、ハリーとやりあいながら、操作盤についているレバーを激しく奥へと押し込む。激しい光が流れ込み、そして

「何書いてるん、アリシア？また小説なん？」

快音を立ててタイプライターを叩く眼鏡をかけた小さな少女の肩越しに、一回り大きな少女が声をかけた。

「そうだよ、インギー」

そう言いながら、アリシアは次の紙へと移る。

「よく飽きんのねえ」

「そっちこそ…何やってるの」

「ナイフ磨いてる」

インギーが油を含んだ布で一心不乱に磨いているのは、刀身が反りを打ったアラビアの短剣だ。その切れ味ならライオンすら一刀両断にできるだろう。

「ふふん」どや？」

得意げに彼女はその刀身を部屋の照明にかざし、自分の顔を写すようにして眺めながらそう口走る。

「すごいねえ」

アリシアは顔すら上げず、無感心そうに合図地を打った。だがインギーにとって、そんな事はお構いなしである。そして妙な北欧なまりのイントネーションで、立て続けに話を続けた。

「これさあ、けっこう前にアフリカにおった時もらったんね。パパがダウ船の船長から買ったって言ったかねえ？なんだか結構年代物だとか言ってたけど…まあそんな事はいいで、ちよっとこんな使ってもいいのかな…ってな気にもなっけど」

「ふうん」

「まあ、でも使わんと逆に錆出るかなあ…。あ、そういやあさあ、イエゴロヴァ少佐がサーベル持ってたよね？あんの出所って一体何処なあんだろ、って、考えたことない？もしかしてこれみたく年代

物の…って、聞いてる？」

「ま、まあ」

「嘘やい」そしてインギーは悪意こそなくも、少々からかった目でアリシアの方へ向き直った。「興味ないでしょ、絶対」

「無いわけじゃないよ」

アリシアが、この一方的な会話の中で初めて顔を上げその半開きで、ぼんやりとした薄青色の瞳を相手に向けた。しかも随分とゆっくりとだ。

「でしょう？ほらやっぱ」「そのナイフの刃って」「えっ」

「外宇宙からやって来た未知の金属で出来てるの？」

「…どういう意味？」

断言しよう。アリシア・C・クラーク中尉は無類のSFオタクだ。従って、自分の興味のある事以外はどうでもいいのである。その点では冒険好きの「インギー」ことイングリッド・ダール大尉も、まあ、大して変わりがあるのだろうかないのだろうか…。

「それにしても、暇なあ」

インギーが170cmの長躯を椅子にもたれかけさせながら、ぼんやりとつぶやいた。

「そうだね」

アリシアが答える。

「誰も来ないなあ」

50人は無理としても、少なくとも30人は入りそうな、そんな広い講堂の椅子に座っているのは彼女ら二人だけだ。夜の空気が中で冷気を保つ―いや、閑散としたこの中でも余計温度を下けているのではないだろうか。

「次、誰が来ると思う？」

「賭けっか？」

そのせいだろうか。彼女ら二人の動作もことなく緩慢に見える。

一九四三年四月三日　ヴォルシスキー、連合軍統合航空隊将
校執務室　一六三〇

この基地の執務室は、どれも機能的とはいえども決して地味な場所ではない。例えばその壁は、落ち着いた薄緑の内壁に白木で木の葉をかたどった装飾が縁どるように付いていて、まるでこの建物を囲む桜並木がここまで伸びてきたように思える。また家具も――おそらくロマーニヤからの輸入品だろうが――また同様に植物の意匠でかたどられている。壁際には幅二メートル近い大判の絵が掛けられている。その絵の主題はオラーシャの伝説的英雄、アレクサンドル・ネフスキーだが、オラーシャの伝統的画風とは違う。この国でも西欧風の画風が広まっているのだ。

かつて、この基地はある地主の荘園であり、その領地からは大量の小麦、ライ麦、ジャガイモ、その他もろもろの野菜が育っていた。そしてその収穫物を計上し、収入とするため、この荘館で事務員、秘書が働いていたのである。つまりここは、邸宅であると同時にオフィスでもあったのだ。

今、扶桑海軍中佐の江守貴子が帳簿をまとめているのも、そんな執務室のうちの一つだ。

まだ彼女は、隊長に「なりきれて」いなかった。何人もの個性がバラバラの隊員をまとめつつ、隊のための事務もこなす。それは彼女にとって、初めての経験だった。

「ええっと……この“indication”って……何のことかしら」
特に貴子が苦労していたのは、英語だった。彼女もまた他の扶桑人と同じく、それが苦手だったのだ。もちろんRとLの発音の区別はできない。よく『英語で考えるようにすれば、自然に上達する』と言われている事は知っている。しかし、まだ彼女はそれが出来るほど慣れてはいない。

「あ！あつたわ！」

英扶辞典をせわしくめくっていた彼女は、目当ての単語を見つけ
てつい、喜びの声をあげた。

「お、お忙しいですか？」

その時である。ノックとともにどもった声で、そんな気の弱そう
な声がドア越しに聞こえた。

「あ、いえ、大丈夫よ…ナターシャさんね？」

「は、はい…試験飛行の報告です」

「ドロシーさんも一緒？」

「同行であります」

今度の声は全く逆の、明瞭ではきはきした声だ。

「あら。二人とも入っていいわよ」

「ドロレス・ロペス中尉、報告に参りました」

「ナターリア・ベレゴヴァ少尉補、同じく報告にま、参りました！」

一礼して二人が入って来た。

「審査飛行、ご苦労様。報告書は書けた？」

「はい、これです」と言つてドロシーがリーフレットを手渡す。

「ありがとう、モスクワに送っておくわ。ところで、P-63飛行
脚の件だけどー感想は何か有るかしら。どちらからでもいいわ」

「私から！」

ナターシャも小さく手を挙げたが、誰も気付かなかった。すると

彼女は途端に背中をすぼめて、小さくなってしまった。

「それじゃ、ドロシーさん。どうぞ。」

「はい」彼女は背筋をしっかり曲げ、小さな胸を少し張り出すよう
にして話し始めた。

「率直に述べますと、P-63は本来の制空戦闘脚としての役割は
果たせないと思います。同脚は私がいつも使用しているP-47と
比べても速力に、また上昇力に難点があります。最大速度も時速4

00マイル(650km)が限界でした。また標準装備の1.5インチ(37mm)機関砲も重く、運動性を下げています。また弾道も不安定かつ初速が遅く、空戦で実用的とは言えません。また航続距離が短く、私は同脚を空戦部隊に配備することは不可能だと思います。むしろ地上攻撃に運用した方が現実的でしょう。」

「あ、でも……」ドロシーに圧倒されたのか、ナターシャが消え入りそうな声を挙げた。「機関砲を、も、持たなければ、もっと速く……なると思う……んです。そ、それに……」

「あなたは飛んでいないでしょう!？」

遮ってドロシーが大声を上げた。

「ドロシーさん!」すると穏やかだが、凄みの効いた声で貴子がそれをたしなめた。

「あんまりナターシャさんをいじめちゃダメ。この子、あんまり言わないけど本当はあなたと同じ位飛ぶのが好きなんだから。言わせろてあげなさい」

「すみません……」ドロシーはつい、張った胸を縮こませてしまった。

「あ、あの、私……」ナターシャも相変わらず小さくなったままだ。

「いいわよ。続けて。貴方も審査飛行に立会った限り言う権利はあるの」

「は、はい……上昇力も速さも軽きよ……か、軽くすれば……ちょっとだけ上がると思います……それに、拠点の、防空なら、そ、そんなに飛ばなくてもいいと思うんですが……」

「はい。二人とも貴重な意見を有難う。機会があつたら、上奏するわ。さて、終わりにしましょう。」

「あ、ありがとうございます!」

「ありがとうございます……ただ、少し不思議な事があるのですが」「ええ?」

「重要な審査飛行なのに、どうしてこんなに短いのかと?」

ドロシーはまだ喋り足りないような、複雑な表情をしている。

「あら」貴子の顔に微笑みが浮かんだ。「そうね、まだ言ってなか

「つたわね」

「…何をですか？」

「今日、新人の子がここに着任したの。この後講堂でみんなに紹介するけど、とってもいい子よ」

「…？」

とたんに、恥ずかしそうに下を向いていたナターシャが顔を上げ、少々の期待を含んだ驚きの表情が浮かべた。

「…ふーん」

一方のドロシーはなぜか不満げに、ふくれっ面をしている。そんな彼女に、貴子が不思議そうに問いかけた。

「あら、ドロシーさん。なんでそんなに…」

「な、なんでもないです！先に講堂に行ってます！」

そう言い残すと彼女は早足でどこかに行ってしまう、後には二人だけが残った。

「ナターシャさんは、どう思つかしら？」

「ちょ、ちよつと楽しみ…です」

「歓迎会の後、ごはんも出るわよ」

「…」

彼女は何も言わず頷いた。

「ナターシャさんは何が食べたいかしら？」

「コンポ…」

「なあに？」

「コンポートが…食べたい…です」

貴子はまっすぐ顔を見て言った。

「大丈夫。ちゃんとあるわよ。」

第5話 地上支援の精神と、あまりそれに関係ない人

一九四三年四月一五日　ヴォルシスキー、雑貨店『ゾーヤおばさん』　〇九〇〇

何処の軍隊でもそうだが、他国へ進軍し、そして駐屯するときには兵士達のために売店を設ける。それが酒保だ。

ここヴォルシスキーの航空基地でも例外なく、粗末な急造の丸太イス小屋ながらも、酒保がある。しかし「酒」保というわりには、酒も煙草も置いていない。それはそうだろう。未成年も居るのだから。そのかわりにキャンディーとチョコレート、そしてカラフルな外出着ばかりが置いてある。まるでファンシーショップのように。

と、いうわけでこの基地の整備員、警備兵などに加えて司令のルーデル大佐はいつも酒や煙草を切らすと、とぼとぼと外へ買い物に行く羽目になるのだ。ただ彼女にとって救いなのはこの元地主の館であった基地の周りには、いくつもの商店が立っていることである。『ゾーヤおばさん』というこの雑貨店も、そのうちの一つである。そこへ大佐は足早につっこみ、「何にしましょう？」と聞かれるのもまどろっこしい、とばかりに入るやいなや店番をしていたルパシカの中年男性に向かって

「ミルデゾルテ！」

と叫んだ。ミルデゾルテはカールスラントの煙草の銘柄である。

「あん？」

そんな彼女を、黄ばんだヨレヨレのルパシカの男は随分とあっけにと取られた顔で眺めている。

「ミルデゾルテだよ、みーるーでーぞーるーて」

「なんだそりゃ」

当たり前だ。自国にしかない煙草を他国で、しかも欧州の辺境み

たいな所で探す時点でもう理論的に間違っている。例えるなら南リベリオンの小さな町でマイルドセブンを探すようなものだ。

「煙草だよ！ほらすーすーめらめらすばすば」

そう、もうカールスラント人ですら理解できない、いや理解したくない意味不明のジエスチャーで、煙草であるということを説明する。彼女は言葉が通じない、と思い込んでいるようだ。

「あー。それ、煙草だか」

するとその男は、長い髭を揺らしつつ手揉みして、「なるほど」といったようなジエスチャーで返す。…たぶん、わかった原因はジエスチャーではないだろうが。

「ほーら。やつぱ、わかるんじゃない！で、あんの、ミルデゾルテ？」
もうかなりルーデルはイライラしているようだ。だんだんと語気が強く、早口になってきている。

「ミルデゾルテかて…姉さん、それ何処の煙草だか」

そんなルーデルを全くと言っていいほど気にしないかのように、男はのんびり、いやむしろ「のんびり」と書きたいくらいの調子でルーデルに言葉を返す。

「カールスラント！」

「へえ…カールスラントだか…そんなの無いてば。ベロモロカナルならあるけど」

「あー、もうそれでいいわ…」

ルーデルはもう、何一つ言い返す気にはならなかった。

ちなみに著者も、こういった類の話は随分と聞いたことがある。

例えば扶桑でどんな薬屋にもある「正露丸」。これは扶桑人なら皆が御存知の通り、腹を下した時に役に立つ薬だ。ところがこれが一旦海を超えてみると違う。海外で水や食物が合わず、腹を下すというのはよくある話だが、そうなった所でホテル近くのファーマシーに行き、「セイロガンプリーズ！」と助けを求めてもまず救いはない、というのは扶桑の海外旅行者には知られた話だ。

またこんな話も聞いたことがある。大戦も始めの頃、欧州へ向かう扶桑海軍の軽巡がパナマ運河を通る前にリベリオン西海岸のサンデイエゴに入港した。水兵たちはその時、戦いの前にここをせんとばかりに上陸し、地元のバーで飲めるだけ飲みまくったそうだ。そんな中、ある機関兵がバーで「カルピスサワー！」とバーテンに注文した。だがそのバーテンはもちろん分からない。「Call! What!？」と答えたそうだ。だが機関兵は譲らない、というよりカルピスサワーが万国共通の飲み物としか思っていない。それで何回も「だっかつらっ、カルピスサワーってんだろっ!？」「What!？」「じゃあ、ウーロンハイでいいや!」「What!？」「おめウーロンハイがわかんねえのかよ!？」「What!？」「テメー何中だっ!！扶桑人ナメてんじゃねえ!！」と言い合っているうちに、とうとう殴り合いとなり憲兵沙汰となった、などという話もある。

といって書いている私も、そういう経験が無いわけではない。高等学校の頃リベリオン西海岸の大学で語学研修をしたことがあったが、この時驚いたのは「ボトルに入った茶を買う、あるいはそれを売る」という文化が無いことである。それどころではない。ファーストフード店のフリードリンクにすらアイスティの類が無いのだ!と言うわけで、いつも甘ったるいジュースか、炭酸飲料ばかり飲まされる羽目になったのである。しかし成人してからかの国に行っていないので、現在ではどうだかは私も分からないが…。

一九四三年四月一五日　ヴォルシスキー、連合軍統合航空隊屋
外運動場　〇九三〇

「いーち、いーち、いっちにー」

晴れた空の下、掛け声高らかに乾いたグラウンドで一団の少女達がランニングしている。彼女たちはこの東欧に発足した世界初の地上攻撃専門の国際部隊、301 JGAWだ。人員が揃い、やっと

始動したこの部隊。今彼女たちが着ているのは戦闘服ではなく各軍制式の運動着だが、それにしたって白、黒、灰色、カーキ、オリブ・ドラブ、と様々で、まあ地味な色ばかりでカラフルではないが、なかなか興味深い。

先頭で声を出し、集団を先導しているのは扶桑皇国海軍の中佐、江守貴子。白い運動着を着て、黒い三つ編みを揺らしている。シャツの下に着た水着兼用のボディースーツから伸びた足といい、体系といい控えめだがそここの所を行っている、と言ったところか。

そして軍旗を持ち、銀髪をなびかせながら並走するのはオラーシヤ帝国航空隊の少佐、エカテリーナ・M・イエゴロヴァ。カーキの一般兵用戦闘服に革長靴で、一見走りづらそうにも見えるが実はこれも案外楽である。

そのすぐ後に続くのはカールスラント空軍大尉のフランツィスカ・ランゲ。ハイルイズのポニーテールがふりふりと動いているのはチャーミングだが、一方で白いタンクトップに包まれたその体には無駄がない。

その横に居るのはバルトラント義勇空軍大尉のイングリッド・ダール。北欧出身だが、その肌がどこことなく小麦色なのは長く彼女がアフリカはタンガニーカに居たからであろうか。また灰色の運動着越しにも、長軀に付いた乳房が音を立てそうなほど暴れているのがよくわかる。

更に後ろ。オリブ・ドラブのシャツでやったらめったら真面目くさった厳しい顔をしていて、まるで精神的に自分を追い詰めているかのように思えるのはリベリオン陸軍航空隊中尉のドローレス・アナ・ディエゴ・マリア・デ・ロス・レメディオス・カリエド・イ・ロペス。まあいちいち書くのも骨なので「ドローレス・ロペス」でよからう。彼女の巻き毛を横に二つ束ねたツインテールがまるで小動物か何かのように動いているが、そんな事を彼女は一切気に留めていない。

その隣のちんまりとした眉毛の太いメガネの彼女。それがブリタ

ニア王立空軍中尉のアリシア・C・クラークである。カーキ色の運動着で、どことなく寝不足そうな半開きの目、ぼさぼさの髪、そしてどことなくやる気の無さそうな走り方である。

その後ろの黒い運動着で、これまたちゃんまりとしているのはオーシャ帝国航空隊少尉補のナターシャ・T・ベレゴヴァ。髪の毛の横の青いリボンを揺らしながら、他に遅れまい、遅れまいとちょこまかと頑張っている。彼女もカーチャのように革長靴を履いているが、サイズが合っていないのかどことなく走りづらそうだ。

さて…おっと。忘れてはいけない、我らのメインヒロインがまだ一人、後ろに居た。それがカールスラント空軍一等曹長、ユノー・ボイスだ。彼女もよたよたと、なんとか頑張つて遅れまいとはして走っているが…あ、また転んだ。

さて、そんなまさにもぎたて果実の出荷のようなみずみずしい少女の団を、向こうから眺めている二人が居た…と言って、別段口リコン男の事を言いたいのではない。この基地の司令、ハンナ・U・ルーデルとその副官、アーデルハイトである。

「なるほど…結構揃ったなあ」

「このほかに扶桑皇国の華帯義勇隊、ブリタニア植民地軍が人員の派遣に同意しております」

「なるほど。しかし…何となく目立たない所からの派遣が多いような気がするが」

「目立つところからはみんな戦闘部隊に行くんでしょう」そして呆れた雰囲気が続けた。「戦闘爆撃部隊なんて、二線級の人員とストライカーでも送つとけばいい、なんて思っているんじゃないんでしょうかね？」

「そうでもないぞ、ハイディ」

「そうなんですか？」

「そうだとも。」ルーデルは誇りを失っていないかと言うごとく、胸を張っている。

「地上支援が制空戦闘に劣る、などと言うことは決して無い。ああないと。必要なテクニクは違えども内実的には全く変わらないんだ。お前だって理解しているだろう？爆弾を搭載したストライカーを操って攻撃を加えることがいかに難しいかくらい」

「もちろん」

「それゆえだれにでも出来る事じゃないんだ。むしろある意味で地上支援は航空任務の中では危険な部類に入る。爆弾を搭載して運動性も劣っているところを敵に狙われれば危険極まりないからな。それに戦闘爆撃機は必要とあらば爆弾を投棄し、応戦しなければならぬ。つまり両方の経験、あるいは才能が必要なのだ。」

「必要性だって劣ってはいない。ええ、劣っていないとも。地上の兵士達がどれだけ我々を必要としているか、わかるかね？もはや現代戦は機動力ゆえに砲兵がいつでも支援出来るわけでは無くなってきたているんだ。そこで出番となるのが、我々って言う事だろ。我が国の戦闘教義は電撃戦じゃないのか？」

「その通りですね」

「確かに……じゃあ今居るウィッチは、決して二線級でも何でもないと言うことですか？」

「その通り。たとえ出身が植民地だろうが、世界の端だろうがな。私もそれを理解したきっかけになったことがあったな……確かスオムスに居た時の……」

「アナブキ中尉ですか？」

「ああ、そうだった。東洋のウィッチにもあんな優れた人物が居るのかと見直したよ……ところで、煙草ない？」

「さっき買ったじゃないですか」アーデルハイトは不満そうだ。この前線の地ではそれは高く、貴重なのである。

「ハズレだった」ルーデルはうつむく。「しかも大外れ。魔女の大釜セルの中身、って感じだな。私が今まで吸ってきた中で最低の味だ、というか煙草であることすら怪しい」

「はいはい……」呆れ気味にそう言うと、アーデルハイトはポケット

からマルボロのパックを取り出し、一本渡す。「高いんですからね。大事に吸ってくださいよ」

「わかったよ…」小声でつぶやくと、ルーデルは愛用のイムコ・オイルライターのリッドを開けた。小さな火が灯る。

「ん…はああ…」喫煙者ならわかるだろうが、最高の気分だ。

「ところでハイデイ。これどこで買ったの？」

「リベリオン海兵隊の駐屯地ですよ。ほら、川岸にある…」

アーデルハイトも煙草に火をつけている。

「わかった。今度からそこで買っわ…」ところで

「司令！ウナ電ですっ！！」

何か言おうとしたルーデルを遮って、青色のカールスラント軍服を着た通信兵が大声を上げて駆け寄ってきた。相当の緊急事態なのだろう。

「どこからだっ！」急に向き直り、その通信兵に呼び掛ける。

「連合軍スタフカからです！」

スタフカ…つまり総司令部から、ということとはさらにとんでもないことである。それこそモスクワで軍事クーデターでもあったか、突然ネウロイの大攻勢が始まったか、しか思いつかない。こりゃ一大事だ。

「内容はっ！」

通信兵は敬礼も忘れて、手に持った電信用紙を読み上げた。

「ヴォルシスキーに向かっていたウィッチが一人、行方不明のこのです！」

「な…ぬわんだとおおおおおお！？」

一九四三年四月一五日　オラーシャ帝国領トルキスタン、サマルカンド　一二〇〇

かつてこのユーラシア大陸を、それこそ扶桑皇国の平城京から口

マーニヤのローマまで、一本に結ぶ交易路があった。それがシルクロードである。その中継地点として栄えたのが、ここサマルカンドだ。町には青を基調とした壮麗な宮殿や寺院が並び、それがカラッと晴れた空の青と調和して美しい。

「ここ、あんまり埃っぽくないあるネ」

まあ、そんな事は一ミル…もとい一ミリも気にせず、ひたすら食べることに熱中しているこの少女。彼女こそが先程「行方不明になった」とヴォルシスキーで大騒ぎになっていた、というかさせていた扶桑皇国、華帯民国義勇飛行隊の一等飛曹、チェンフェイシェ陳飛雪、扶桑名、押井静子である。

「いえーい」

こら。笑っちゃいけません。褒めてないんだから。

「はむ、はむはむはむ、はふはふはふ」

…括弧書きにするのが辛いんだよ。こんな擬音を…とは言えこう括弧書きしたくなるほど、彼女は旺盛な食欲を見せている。さっきから次々口に運んでいるのは「ギョロラグマン」。ちょうど平打ち麵に肉、野菜、フクウスナ唐辛子の牛トマト煮込みをのせたような料理だ。

「どうだ？ 美味いか？」

そう、食堂の主人はフェイシェにオラーシャ語で聞く。

「オラーシャ語わかんないネ」

と、こつちも華帯語訛りだらけの英語で答える。

「ああ…」主人の男はこの少女がここに来たいきさつも何もかも、そもそも正体自体掴みかねて困り果てている。

「この子、一体なんなんだろな」食堂の男は彼の妻と思われる、恰幅のいい丸々とした女に話しかける。

「多分華帯人キタイスキーじゃない？ 目元とかがそれっぽいし」

「でもこんなに小さい女の子が一人で、しかも馬で来るなんて！ 何の用だろ」

「多分軍人よ。ほら、最近西の方で大きな戦争をしてるって言うじ

やない」

「だったら男が行くもんだろ？」

「違うわよ！最近の戦争は女手が必要なのよ。ほら、向かいのアイシャちゃんも軍隊に取られたじゃない。ついこないだ！」

「へえ…そついやそうだったっけなあ」

「ほら、またトボけて…下手に魔法なんて使えちゃうとああなっちゃうのよ、多分」

「ああ…じゃ、どうやって話せばいいんだろ。言葉はわからんし…」
「イムランでも呼べばいいじゃない！あの子高校にも行ってるし外国語ぐらいわかるわよ」

「でも華帯語は…」そう男がためらっている間に、その妻は家の奥に向かって「イムラン！イムラン！ちよつと出てきなさい！」と叫んだ。

「なんだよ母さん…俺明日試験だっていうのに…」出てきた彼女の息子は、丸い瓶底眼鏡をかけてずいぶんと頭がよさそうだ。手には物理の教科書を持っている。

「試験も何も無いわよ！そんなもん山羊にでも食べさせちゃいなさい！だいたいあれよ。あんたはいつつも大切なときに限って居ないんだから。たまには表に出ないともやしになっちゃうわよ」

「はいはい…で、何の用？」

「この子よ！」強引に手を、フェイスエの方に引つ張っていく。「この子がどこから来たか、あたしに教えて頂戴」

「あー。わかったわかった…」そう言うと、彼は中学でも習うようなごく簡単な構文、つまり“Where are you from?”と聞いた。

「華帯あるネ」

と、こつちもまた訛っては居るが、英語で答えた。

「華帯だつてさ」イムランは「こんな簡単な事を…」と呆れるが如く、両親に報告した。

「やっぱりな」

「あら、あんたもたまにはカンが冴えるのね！で、次は何で来たのか教えて頂戴」

彼女の息子が英語で聞くくだりは、私だって書くのが面倒なので省略する。

「私ウィッチある。ヴォルシスキー言う所目指してるネ」

「ふむふむ…ヴォルシスキーって、ツアリツインってところの近くだよな？」

「そう聞いたアル」

「あ、なるほど」

イムランは彼女の言葉を、かなり理解している。

「イムラン、何て言ってるのか教えなさい」

「ウィッチだって。ツアリツイン目指してるらしい」

「ツアリツインってどこよ？」

「カスピの向こうだよ」

今度は食堂の主人が教えた。この男も、少し賢いらしい。

「おかわりー」

フエイシエが空の皿を掲げる。

「おお、いい食べっぷりだね。タダでいいですよ」

主人の男はかなり乗り気だ。普段なら同額の料金を吹っかける所であるが。

「あんた、そんな事だから今月もお金なくなるのよ！」

一方、その妻はかなりご立腹のようだ。

「いいじゃねえか。遠い所から戦争に行ってるんだ。食わしてやつたっていいじゃねえか」

「あんたの馬鹿！バカ！ばか！ばか！」

相変わらず怒っている。

「はいはい。うっさいうっさい。引つ込んだ引つ込んだ…」

「私は引つ込まないわよ！」

二人はとうとう喧嘩腰になり始めた。

「やれやれ…またかよ」

そして、その横で呆れているのが、彼らの息子、イムランである。

「あの二人、何言ってるアルかー」

「分からない方がいいと思うよ…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3033i/>

Assault Witches;第1巻 “ Zitadelle ”

2010年10月10日19時52分発行